

クリ見本園の収穫状況について

特用林産物の指導啓発を図り、かつ調査研究を行うことができるクリの見本園を1989年（平成元年）に当センター開設と同時に開園して7年が経過しましたので、栽培管理の内容と収穫状況についてとりまとめました。

1 クリ園の概要

(1) 場所及び環境

場所は林業総合センター構内林地で標高は850m年平均気温は10℃、平均降水量は1.366mmという高冷地です。

母材及び地質は花崗閃緑岩（火山灰）で土壌型は黒色土で腐食に富み地形は西向きの山麓緩斜面で乾燥するところです。

(2) 品種と植栽方法

スギと広葉樹の混交の幼齢林を伐採して苗木を1989年（平成元年）に12aの面積に植栽しました。

植栽した品種は早生系の丹沢・国見・人丸と、中生系の利平です。早生系品種は苗木生産業者から接木一年生苗木を購入し、利平は旧林業指導所のクリ園から採取した種子を実生繁殖により養成したものです。品種の選定は旧林業指導所当時のクリ園の収穫状況から、収量の多かった丹沢と新品種の人丸と国見を導入しました。人丸は丹沢の直後に熟すなど収穫の継続性を主に考えましたが、クリタマバチの抵抗性が中程度のため、抵抗性が比較的強く大果となる国見も選定しました。

植栽は昭和63年11月植え穴を直径80cm深さ80cm程度に掘り、この穴に基肥を落葉5kgとようりん1kgの混合したものを入れ、その上に化成肥料を窒素成分で20gを土と混ぜて入れ、間土10cmをおいて苗木を平成元年3月下旬植栽しました。

(3) 管理

ア 追肥を平成元年から平成4年の間は、11月下旬に苗木の回りを円形に耕耘して落葉堆肥3kg苦土石灰50g、化成肥料（20：20：14）を30g施用しました。平成5年以降は礼肥もかねて化成肥

料（20：20：14）を40kg全面に施しました。

イ 病虫害防除は毎年2月から3月の冬期にクリオオアブラなどの駆除のため石灰硫黄合剤7倍液かマシン油乳剤20倍液を散布しました。平成5年頃よりクリ園周囲にあるシバクリにクリタマバチの被害が発生し、植栽した丹沢にも被害が見られるようになったため、平成6年から虫こぶから成虫が脱出する直前の6月下旬にアディオソル乳剤2000倍液を散布しました。なおシバクリはクリタマバチの被害が大きくなったのでクリ園周辺のは伐倒焼却しましたが、植栽木の丹沢を主体に微害であるが拡大しつつあります。クスサンによる新葉の食害は若干見られたがアディオソル乳剤で駆除できました。平成4～5年にかけてモモノゴマダラメイガによる果実の食害（虫クリ）が多かったので、平成6年のアディオソル乳剤の散布や、収穫後のイガの焼却により被害の減少に務めました。

ウ 縮伐と間伐…平成5年頃より枝の張り具合を見て、低仕立てになるよう整枝を行うとともに、枝が交差するようになったため密度調整のため、利平の抜き伐りを行ないました。

エ その他の管理…植栽当年度は凍害防止のためわら巻保護を行うとともに、下刈は年に2回行いました。

2 クリ樹の生育状況と収穫等

ア 生育状況

高冷地に植栽して7年経過した幼木期の生育状況は表一に示しました。丹沢と人丸は同程度の形状ですが、国見の生育がやや劣っています。樹高は植栽して3～4年目に上方に伸びる枝をカットしたため自然状態ではありませんが国見の生育が遅れ、利平は実生苗のため、樹勢が旺盛になり他の樹種を被圧しはじめたので抜き伐りをしていきます。

表一 平成7年収穫後の成長状況

品種	本数	平均根 元径cm	平均樹 高 m	枝張長さ (四方向平均)
丹 沢	14	14.5	4.8	2.3
人 丸	14	14.6	5.9	2.3
国 見	14	12.5	3.9	2.0

イ 収穫状況

収穫状況は表一2に示したが、前述したように、まだ幼木期であることや、近年の異常気象の影響による結実不良あるいは若ハゼ（成熟前にイガが口をあける）などで、収穫時期や収量は年により異なり不安定であり品種の特性にそった収穫を得るには至っていませんが、次第に収穫量は増加傾向にあります。しかし平均収量は丹沢が優れていたのに対し、他の樹種は丹沢の半数以下でした。また果実一個当たりの大きさは丹沢が優れていましたが、大果の特性を持つ国見は寒冷地の影響などから成育が遅れたり、異常気象により結実時期の遅れなどから粒ぞろいが悪く全体に粒が小さい結果となっています。害虫防除は平成5年まで冬期以外実施しなかったため平成4年から5年にかけて虫害率が増加し、特に国見に虫害が多く見られました。

なお収穫は自然落下したものを拾い集めるように心掛けましたが、土・日曜日の前は一部強制落下を行うとともに、平成6年以降には夜間落下したものがすべてリスに食されて皮のみになってしまうので夕方までに一部強制落下させました。

表一2 収 量 状 況

品種		丹 沢					人 丸					国 見					備 考
年	本数	総収量 kg	良 果		虫害 率%	1本当り 収量 g	総収量 kg	良 果		虫害 率%	1本当り 収量 g	総収量 kg	良 果		虫害 率%	1本当り 収量 g	
			個数	重量kg				個数	重量kg				個数	重量kg			
2	16	18.4	100	18.4	0	1,150	1.2	50	0.9	25.0	75	2.6	120	2.6	0	162	
3	16	28.5	1,500	25.9	9.1	1,781	23.5	1,560	21.2	9.8	1,469	18.8	170	15.3	18.6	1,175	
4	16	15.9	310	4.8	69.8	994	22.5	610	7.4	67.1	1,406	10.0	150	2.5	75.0	625	
5	16	45.1	3,000	29.5	43.6	2,819	26.4	2,050	19.3	26.9	1,650	17.5	510	5.7	67.4	1,094	冷夏・長雨
6	16	76.3	4,290	64.7	15.2	4,769	10.2	700	8.4	17.6	637	38.5	2,000	33.1	14.0	2,406	少雨・猛暑
7	16	82.0	4,000	68.2	16.8	5,125	40.3	2,610	35.1	5.2	2,519	17.5	2,200	10.2	12.9	1,093	少雨・猛暑
6年の平均		44.4	2,200	35.3	20.5	2,773	20.7	1,097	15.3	25.6	1,293	17.5	858	11.6	33.8	1,093	

良果の平均個重
15.9 g

良果の平均個重
14.0 g

良果の平均個重
13.5 g



(若ハゼ)

3 栽培上の参考事項

クリは昔ながらの栽培で旬を感じさせてくれる果実で、中山間地の土地利用などに適しています。しかし収益性が劣ることやクリタマバチの被害によりせっかく開園しても途中で放棄する事例が見られます。適切な維持管理を行いたいものです。

1) 地的の選定…永久樹種を植えて成功させるポイントです。肥沃な土地を選びます。

2) 樹種の選定…開園する土地の地形・標高あるいは土壌などにより品種の構成を検討したり、販売面から売れるクリづくりをします。

ちなみに県下最大の産地小布施では、銀寄が主体で丹沢・筑波・小布施2号などから構成されています。また別所温泉森林公園のクリ園は利平をベースに有磨・丹沢で構成されています。

なおクリは他品種による受粉のため2、3の品種を混植します。

3) 施肥…樹勢が弱ると害虫の被害を受けやす

くなります。このため基肥を十分おこなうとともに追肥・実肥・礼肥を行います。

4) 縮間伐と整枝・選定…クリは光を多く要求する樹種です。イガが樹冠の外側の表面近くにしか着かないように、枝が交差して暗くなると枯れ上がり収量が減少したり、病害にも弱くなります。

残したい枝を決めて剪定したり陽光が十分当るように縮伐や劣勢木の間伐をします。

5) 病虫害防除

被害を未然に防ぐ予防管理を行います。

ア) クリタマバチ…樹勢を弱らせないように追肥や、剪定管理と成虫が虫こぶから脱出する前に

アディオン乳剤2,000倍液を散布します。

イ) モモノゴマダラメイガ…イガに産卵して虫クリの原因になります。7月下旬から9月の間に2～3回くらい、エルサン・パプチオン・ディプテレックス・スミチオンなどの乳剤か水和剤を散布します。

ウ) クリイガアブラムシ…開花直後に寄生すると幼果が落下したり夏季に寄生すると若ハゼや果実が小さく収量が少く収穫期間が伸びます。7月にはスミチオン乳剤1,000倍液を2回ほど散布します。

(特産部 一ノ瀬)